

No. 1154

# 未来の家

## —埼玉・草加—

埼玉県草加市に太陽熱で温めた水を使って冷暖房から給湯までまかぬ“未来の家”ソーラハウスがある。このソーラハウスは科学技術庁が始めたという実験住宅で日本では初めての試み。朝の5時から自動的に暖房が始まり、まだ寒い外をよそに部屋の中は温室の様にポカポカ。この様な快的でうらやましい生活を送っているのは新倉さん一家。屋根の上であたためられた水を蓄え、これを熱源にして冷凍機や熱交換器を動かすというしくみになっている。機械室のチェックと一日の日射量、消費電力を測定するのが新倉さんの日課。この実験で「燃料費を安く、安全で快適な生活を」という国民の夢も遠いものではなさそうである。

# 36年ぶりの故郷

## —韓国—

梁龍柱、日本名由良維規さん（65才）今しっかりと手をとりあう姉との再会は実に36年ぶりであった。何十年ぶりかの母国を訪れていた北朝鮮系在日朝鮮人の墓参団の一一行は、1月末、釜山で解散それぞれの故郷に向かった。釜山市東萊。そこが梁さんの故郷。姉が守り通してきた家は衰いもあらたにそこにあった。司法書士をつとめるおい夫婦やかけつけた肉親らと話がはずむ。肉親のきずなは36年の空白を埋めていく。食事がすすみ酒がまわり、次第にうちとけ、故郷の一夜は更けていく。故郷の印象を梁さんは、“本当に感激無量でね、まずきれいでびっくりしました。日本で聞いた話とここでの発展ぶりをみたらね、これ程発展していたとは考えていなかった。とにかくどれひとつ見ても涙が出て仕がないですね”少しづつよみがえる故郷の記憶。当時通った小学校も、すっかり変っていた。ただ運動場の隅の大木だけは今もあり、その面影を残していた。

1月31日旧正月。韓国では今もこの日に歳拌の行事を行う。祖先の靈をなぐさめ、福を内にもたらすものだという。梁さんにとっては何もかもなつかしいものばかりだ。貧しかったけれど家族が幸せに暮らした昔。戦いがそれらをひとつひとつこわしていく。しかし今よみがえたささやかな幸せ。歳拌をすませ梁さんは墓まいりに出かけた。父や母に36年ぶりに訪れたことを告げわびる。分断の悲劇は戦後世界の中で幾つかの民族があじわった。しかしその中でも最も悲惨だった朝鮮半島。今なお南北離散家族の再会が実現しないのはここだけだ。

政治をこえ、イデオロギーをこえて南北離散家族の再会の日が訪れ、民族の統一が実るのを願ってやまない。